歴史軸におく『赤い鳥』一〇〇年
――誤解と幻想からの脱却に向けて――

佐藤　宗子

今から二十年前、『日本児童文学』一九九八年七・八月号で「特集＝「赤い鳥」から八〇年」が組まれた時、総論を担当した私は、冒頭で「雑誌『赤い鳥』の形態を把握しているのは、一部の研究者を除けば、きわめて数が少ないに違いあるまい。」と述べ、その前提のもとに、イメージの中の『赤い鳥』とその実際を交錯させつつ論を展開した。（「何が『赤い鳥』か、『赤い鳥』とは何であったか――二つの問いの交錯と「児童文学」――」を参照のこと）。あれから二十年経った今回の特集に際しても、この立場は変わらない。むしろ、今回の依頼状文面を見るにつけ、一層強く、一般における誤解乃至は幻想の強さを感じる。創作の「童話」「童謡」が「現在の児童文学の発展に寄与」したことに、自由綴方を加え、それらのみが成果であるかのような書きぶりの依頼状文面からは、編集委員会メンバーにしても『赤い鳥』の誌面を見ることなく雑誌を捉えているのだろうとの推測を強めざるをえない。

望ましいのは二十年前の小論の先を語ることかもしれぬが、基本的立場を示す必要性のため、まずは前述の論の要点を一定程度、まとめて記すこととする。その上で、この百年間の歴史の縦軸と横軸を瞥見し、『赤い鳥』を相対化した検討の出発を、目指すことにしたい。

一

前述の論の要点は、四点から成る。『赤い鳥』の全体イメージ、河原和枝の論への言及、私なりに捉える『赤い鳥』の特徴、そして研究の可能性である。

まずは、全体イメージについてであるが、その前に、雑誌『赤い鳥』の基本データを示すならば、以下のようになる。一九一八年七月号から始まり、主宰者鈴木三重吉の死により三六年秋の終刊号まで、全一九六冊を数える。この